

「学校林・遊々の森」活動の現状と課題

東京大学大学院
農学生命科学研究科
永田 信 教授

- ☆学校林現況調査報告書
(平成18年調査)
- ☆学校林保有校・学校林の現況
- ☆学校林の利用状況
- ☆今後の課題

今日お話ししようと思っていることは、「学校林現況調査報告書」について、学校林保有校、学校林の現況がどうなっているのか、それがどう利用されているのか、そして最後に今後の課題についてふれていきたいと考えております。

「学校林現況調査報告書」は国土緑化推進機構が1974年から5年毎に調査を実施しています。

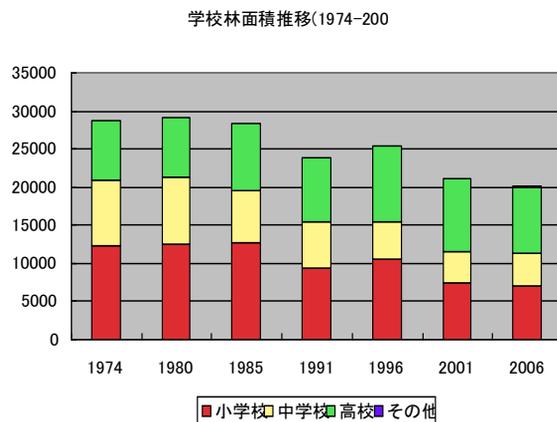
1. 学校林保有校・学校林の現況について

①学校林面積推移(1974-2006)

学校林の面積については、1974年から減少しており、現在は2万haとなっています。面積で割合の大きいグリーンの部分には高校です。

高校は1校当たり平均5ha程度ということで非常に面積が広い。なぜかというとな林業高校という形で演習林で持っていたりということでもかなりの面積を持っていないとできないところがあります。

学校林の面積はどこで減っているのかということも小学校・中学校のところでかなり減ってきています。



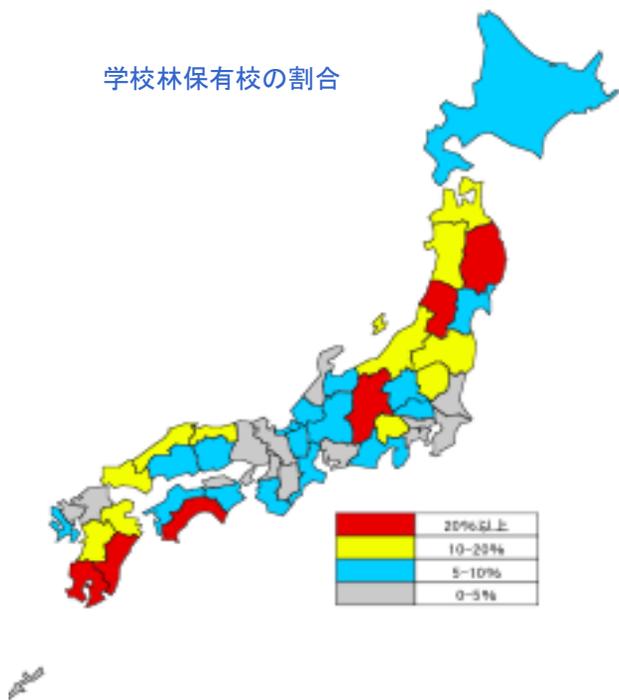
②学校林保有校の割合

学校林保有校の割合では、都市部に少なく、それ以外のところに学校林が多いということになります。

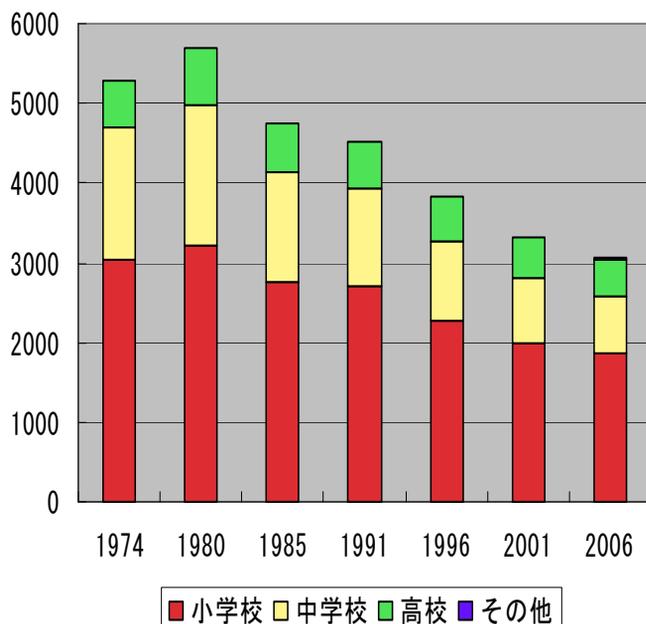
③学校林保有校数の推移

面積が半分近くまで減ってきていますが、小学校中学校足したところを見ますと1980年で5000あったものが現在は3000を切るということまでできています。

学校林保有校の割合

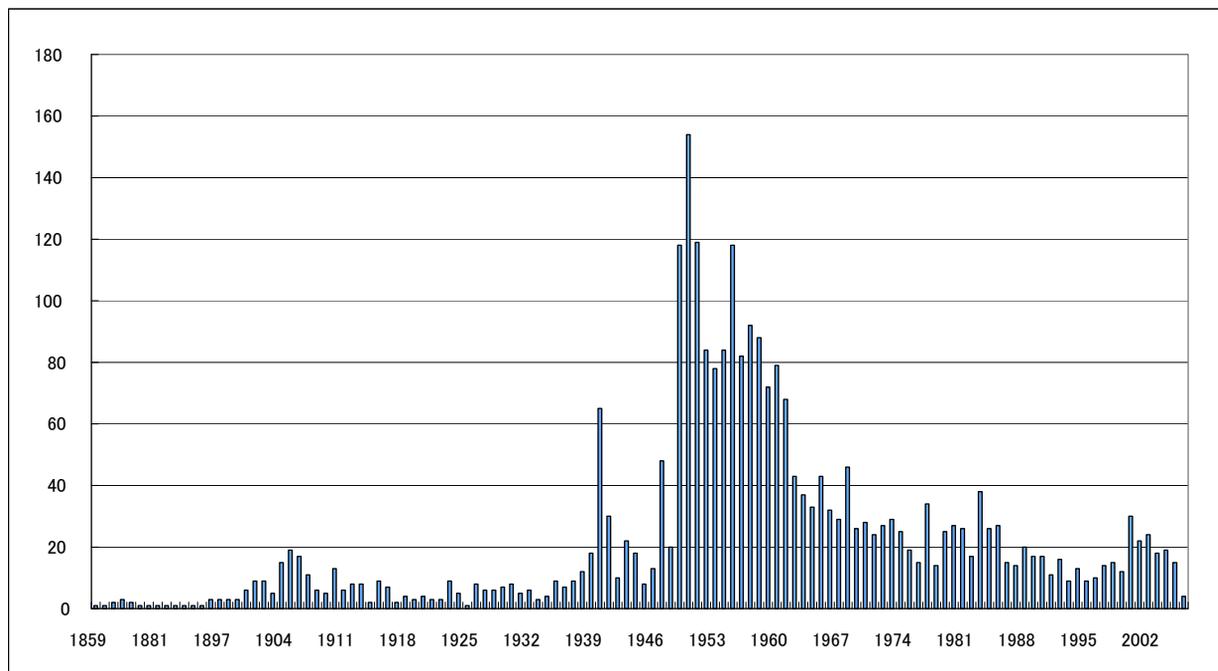


学校林保有校数推移(1974-2006)



④学校林設置年の推移

一体いつ頃設置されてるのかということですが、実際にはもっと古いところはあると思いますが、1950年代頃に緑化運動が盛んに行われていた時に学校林が設置されていることとなります。その他最近少し設置が増えているのは、最近になって学校林が見直される傾向にあるということが言えると思います。しかしレベルとしては1950年代の設置に比べるとずっと少ないということになります。

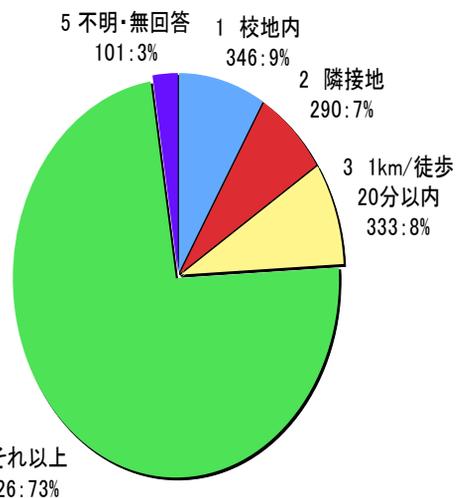


⑤学校から学校林までの距離

今日の報告では学校林が隣接しているであるとか、校地内にあるというような報告が多かったと思いますが、やはり利用するために近くにあるというのが重要なポイントになります。

遠いところにわざわざ出かけて行って泊まりがけでやるという報告が今日ありましたが、なかなかこれをやるというのは地元あるいは市町村等の理解がないとなかなかできないということになります。

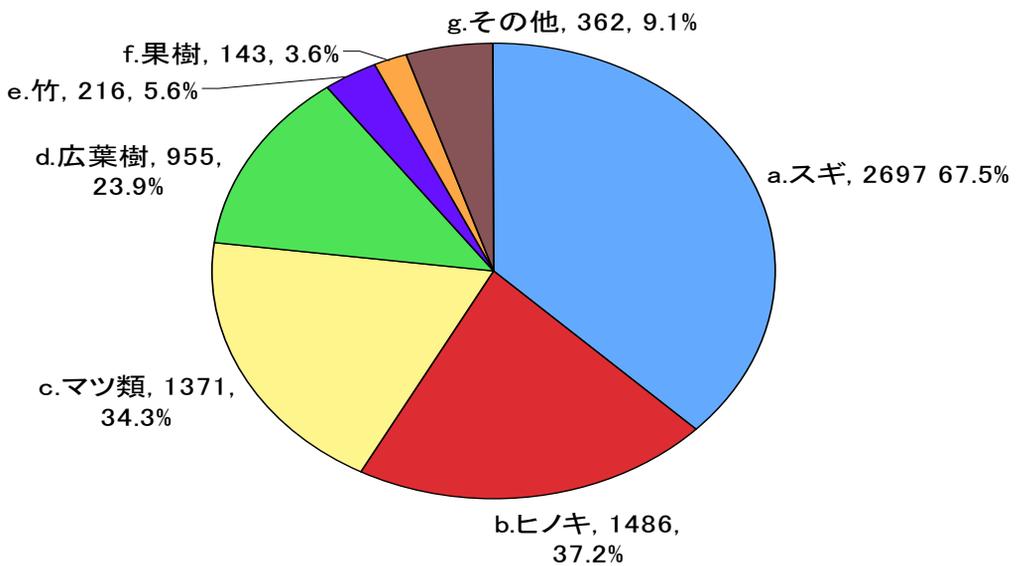
これを見ますと4分の3が1キロないしは歩いて20分はかかるということで利用するのはなかなか大変というところになります。



⑥学校林の樹種

樹種についてはスギが67.5%とありますが、円グラフで67.5%であれば半分超えてなくてはならないのですが、これはそれぞれの樹種を全部出して、%は学校林の数4000で割っていることになるわけです。ですので、スギもあるヒノキもある広葉樹も生えてるとい学校が勿論ありますので、そういうところは重ねて数えているということになります。ですからこれは数値を見るととき円グラフを見る時と複眼的に見ていただきたいというグラフです。実際にはヒノキ、マツ、スギヒノキマツ類というような針葉樹という回答があったのが68.4%です。

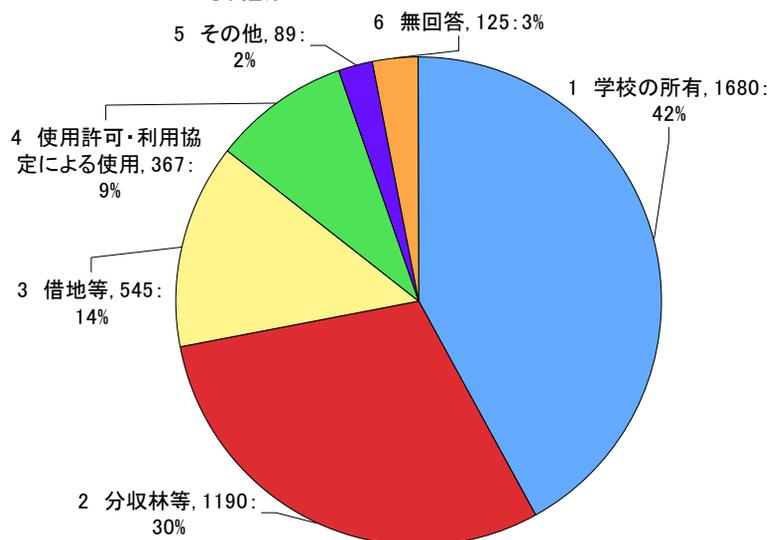
スギヒノキだけというところは利用するのに知恵が必要だということがあります。広葉樹もある、針葉樹もあるというのが24.9%。4分の1くらいは両方あると。広葉樹のみだというのは4%となっています。学校林の利用を考えると針葉樹と広葉樹をうまく利用するということを考える。又は7割の学校林では針葉樹しかないわけですから、針葉樹をどうやって活かしていくのが重要なポイントとなります。実際にスギヒノキは材としての利用ができますので、そちらの方からの活路を見出していくことを考えていかなければいけないのではないかと思います。



⑦学校林の所有形態

学校林をどういう形で持っているかという問いに対する答えですが、これも学校の所有が42%それから分収林等の契約でやっているものが30%あります。

借地のような場合であっても借地の期間が切れるという場合にあってこれを更新していくのがなかなか難しいので、このあたりの問題を抱えている学校も多いということになります。



⑧学校林の管理体制と頻度

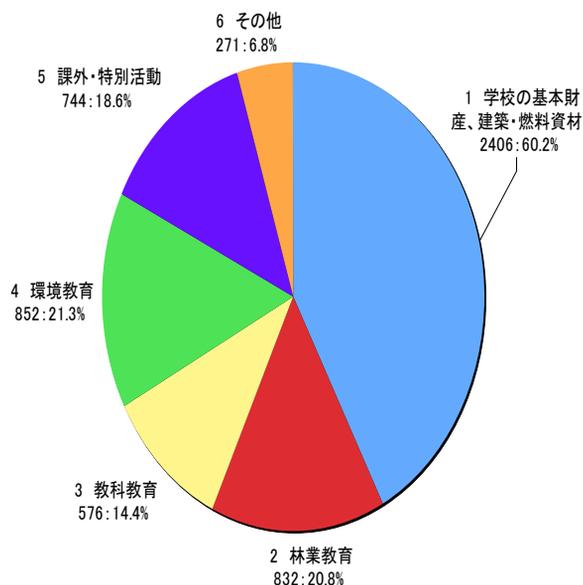
	1 ほぼ毎日	2 毎週	3 毎月	4 学期、季節ごと	5 年に一回	6 数年に一回	その他	合計	
a. 教職員	65	44	88	421	527	412	5	1562	39.1%
b. 児童生徒	39	23	58	269	374	216	1	980	24.5%
c. 保護者	19	5	10	231	511	386	11	1173	29.3%
d. 市町村	4	0	2	46	100	241	10	403	10.1%
e. 都道府県	2	0	5	11	16	22	4	60	1.5%
f. 国の機関(国有林等)	0	0	0	6	8	36	2	52	1.3%
g. 森林組合、林業団体	1	2	4	97	149	261	15	529	13.2%
h. 共有林団体、地縁組織	11	3	4	36	73	85	5	217	5.4%
i. 市民団体、NPO法人	0	2	8	22	15	16	1	64	1.6%
j. 企業	0	0	2	9	18	22	1	52	1.3%
k. 個人	6	2	22	29	56	28	2	145	3.6%
l. その他	10	2	22	50	74	61	12	231	5.8%
合計	157	83	225	1227	1921	1786	69		
	3.9%	2.1%	5.6%	30.7%	48.1%	44.7%	1.7%		(複数回答)

これはどの程度利用されているのかですが、これは5年に1回ではなく年に1回5番目ということです。年に1回というところが約半数です。それから数年に1回という所もあります。

季節毎とか学期毎という形で使ってるのが3割。誰が管理をしているのかということになると、教職員が4割、児童生徒が15%、保護者に参加していただいているのが30%、市町村が10%。このあたりで管理を実際にやっているということになります。

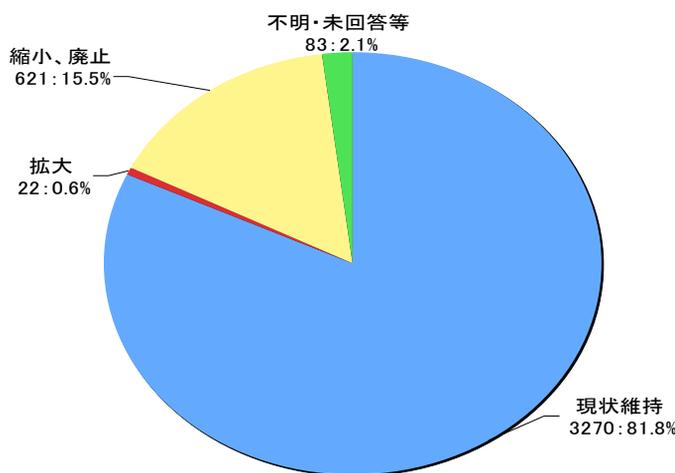
⑨学校林の設置目的

学校林の設置目的はどのようなものであるのか。これもまた数値の方は4000で割ってますので学校の基本財産として、又は建築年材の資材としてということで立てているのが60%ということで6割の学校は財としての学校林ということを考えておられるということになります。教育の方に使うという点では色々な形で使われてる点ですのでわかると思いますけども、林業教育それから環境教育というところでそれぞれ2割、それから課外活動が2割弱、教科教育で使ってるというのが15%というような形で色々な形で一生懸命どうにか使おうということで作られているということなんだろうと思います。



⑩学校林の今後の方針

学校林を今後どうしますかというものを聞いたことに対してです。縮小・廃止というのが残念ながら15%あります。現状維持が8割。拡大というのが0.6%、むしろこれがあるのが素晴らしいなと思いますけども、廃止ないし縮小していくんだということをどうしてですかということを知っているんですが、それに対する答えとしては、当初の目的を無くした、あるいは当初の目的を達成した。それから借地・分収契約利用協定の期限が切れる。多分1番と2番というのはかなりの意味で重なっていると思います。管理が大変であるということ。それから木材の価格が低くなってきたので財産としての目的が果たせないということだろうと思います。



縮小・廃止の理由	2006	
	数値	割合
1 当初の目的を喪失(もしくは達成)	403	64.9%
2 借地、分収契約、利用協定の期限切れ	152	24.5%
3 管理が負担	333	53.6%
4 土地を学校の他の施設に充当	7	1.1%
5 開発等、学校外での土地利用変化	13	2.1%
6 その他	81	13.0%

2. 利用状況について

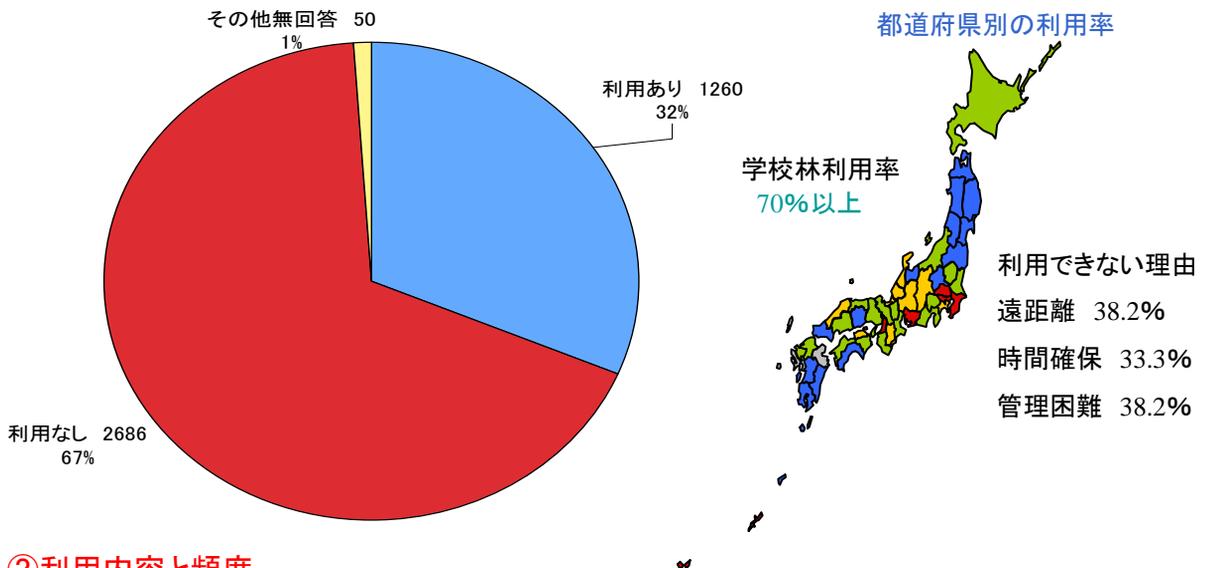
①学校林の利用の有無

こうした中でどれぐらいの学校林が利用されてるかということですが、利用ありが30%、3割の学校が利用していることになります。

都道府県別に利用率を見ると、学校林利用率が高いところは首都圏、愛知、大阪というところが実は利用率が高いんです。学校林がある割合とちょうど逆のような形になる。

これは一つには距離として敷地内あるいは隣接地の学校林の割合が高いところというのが埼玉県、神奈川県、千葉県、沖縄県、愛知県、茨城県、東京都というところが実は高いんです。

ですから利用率の高いところというのは近くに学校林がある。だけど学校林の割合としてはもっと低いということですから学校林使うために近くに作ってきたという所が言えると思います。



②利用内容と頻度

	a.維持管理	b.教科	c.総合	d.生徒会	e.特別	f.課外	g.その他		
1 ほぼ毎日	41	15	17	4	14	43	33	167	4%
2 毎週	29	51	47	7	10	20	2	166	4%
3 毎月	72	81	69	18	15	15	5	275	7%
4 学期、季節ごと	309	365	381	90	137	90	21	1393	35%
5 年に一回	547	114	244	75	239	70	42	1331	33%
6 数年に一回	521	141	162	140	173	143	114	1394	35%
合計	1519	767	920	334	588	381	217		
	38.0%	19.2%	23.0%	8.4%	14.7%	9.5%	5.4%		

どれぐらい使われてるのかと言いますと、やはり季節毎、年に1回、数年に1回という形での利用がまだまだ多いということになります。利用の内容を見ると、維持管理ということで38%という数値なんです。利用がありますかと聞いたときには30%だったわけですから、維持管理というのは利用と言えるのかどうかということになると、これは管理であって利用でないというのが実は多いのではないかと思います。総合的学習での利用が23%ということで非常に多い、教科や生徒会、特別活動、野外活動でも使われてますが、総合的学習の時間で使われるというのが非常に大きいということです。これは現在総合的学習の時間の見直しが考えられてますので、折角学校林というようなところを使って体験的に学ぶということを潰してしまうとしたらこれは非常に残念だと考えております。

③活動種類の順位(2001年調査との比較)

順位	活動種類	実施数	増減	増減率	順位	活動種類	実施数	増減	増減率
1	下草刈枝打ち	1144	+163	14.2%	22	絵を描く	77	+21	27.3%
2	植物観察	859	+163	19.0%	23	山菜茸採り	71	-9	-12.7%
3	植林・植樹	484	+107	22.1%	24	腐葉土作り	70	-10	-14.3%
4	森林の機能	468	+85	18.2%	25	地域調査	65	-8	-12.3%
5	動物観察	303	+92	30.4%	26	ビオトープ	61	+41	67.2%
6	清掃	298	+78	26.2%	27	基地	52	-13	-25.0%
7	植物採集	290	+55	19.0%	28	オリエンテーリング	45	-9	-20.0%
8	森林教室	280	+75	26.8%	29	僕の木私の木	42	+1	2.4%
9	散策	248	+47	19.0%	30	登山	38	+2	5.3%
10	植物調査	186	-1	-0.5%	31	体育	36	+3	8.3%
11	椎茸栽培	179	-17	-9.5%	32	動物調査	33	-8	-24.2%
12	巣箱	147	+35	23.8%	33	マラソン	32	-4	-12.5%
13	その他	129	-8	-6.2%	34	その他栽培	29	+3	10.3%
14	工作	122	+49	40.2%	35	キャンプ	28	+5	17.9%
15	名札	122	+41	33.6%	36	料理	24	-11	-45.8%
16	探検	120	-5	-4.2%	37	読書	14	+6	42.9%
17	森で働く人	114	+38	33.3%	38	詩を作る	10	+1	10.0%
18	ゲーム	84	+9	10.7%	39	音楽	8	0	0.0%
19	動物採集	84	+26	31.0%	40	山小屋作り	7	-5	-71.4%
20	炭焼き	81	+6	7.4%	41	養蚕	1	-1	-100.0%
21	測樹	81	-36	-44.4%	42	陶器	1	0	0.0%

活動種類、どんなことを活動しているのか、約40種類に○を付けてもらいました。

それをみますと軒並み増減率のところを見ると数が増えているんです。ですから学校林をどうにかうまく使おうという所が現在増えてきていると思います。

5年前の調査に比べると5%ポイントほど高くなってるので学校林を利用しようというのがここ5年くらいで浸透してきている。

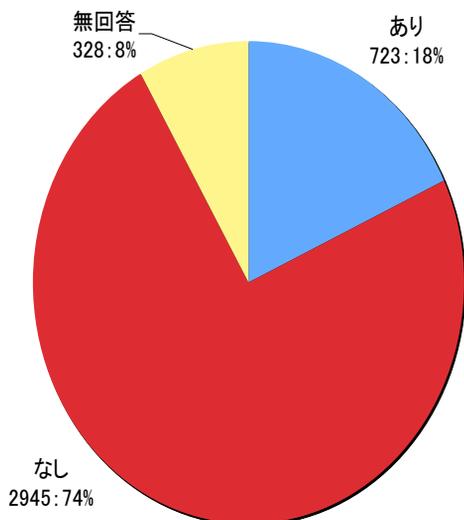
それをうけて個々の値も高くなってきているということではないかと思えます。

④木材利用の有無

特に針葉樹が多いので、木材としての利用があるのかどうか聞いたのですが18%ということで学校林の場所としての利用が3割に対して木材利用が18%は結構大きいと思えます。

どんなふうに使っているのかと聞きますと、木材を売却して学校運営に寄与が8.5%ですから随分あると思えます。その他に机・椅子・本棚・遊具の製作ですとか図工等の材料として使用というのが5%ということで結構あると思えます。

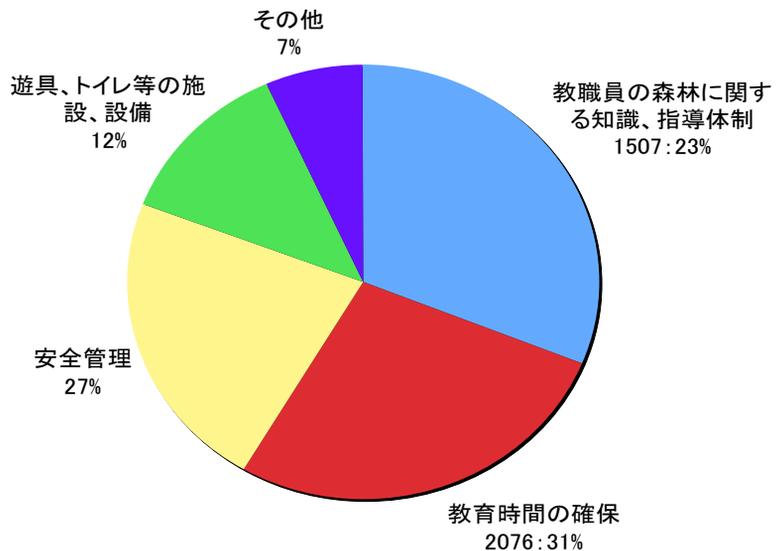
木材利用の内容



1 木材を売却して、学校運営に寄与	341	8.5%
2 校舎建築・改築に使用(構造・柱・内装等)	31	0.8%
3 机、椅子、本棚、遊具の制作	178	4.5%
4 図工や美術、技術科等で、工作の材料として使用	198	5.0%
5 その他	157	3.9%

⑤利用上の問題点

利用上の問題点でどういうところがあるのかと伺ったところ、一つは指導体制あるいは知識というソフト面の問題が23%、それから教育時間の確保の問題、安全管理が27%ということで、遊具・トイレ等の施設整備の問題より、まずはソフト面でのサポートが大きい数値になっています。



⑥学校林への支援者

学校林へどういう方が支援しているのかということですが、これを見ますと森林組合・林業団体が12.7%ということで随分やっています。

そういう意味からいうと林野行政からのバックアップが大きく効いていると思います。

市町村あるいは都道府県、これは勿論行政ですので特に文科行政からくるような面での支援というようなことが大きいのではないかと思います。

それから支援組織・地元の人達の力添えが大きいというのは明らかだろうと思います。

森林組合、林業団体	506	12.7%
市町村	487	12.2%
都道府県	348	8.7%
財産区、地縁組織等	278	7.0%
市民団体、NPO法人、助成財団等	148	3.7%
個人	126	3.2%
その他	104	2.6%
国(国有林等)	84	2.1%
企業	15	0.4%

⑦利用に対する支援

支援がある所と、支援が無い所で利用があるのかないのか聞いたのがこれですけども、これを見ますと、支援ありという所では利用ありというのが60%ということです。

ですからやはり支援をしていただける所では利用が進むというのはこれは当然の結果としてあると思います。

		支援あり		支援なし	
利用あり	1260	759	60.2%	398	31.6%
利用なし	2690	398	14.8%	2076	77.2%

3. 今後の課題について

私共こういうふう調べてきて、どうも新しい学校林というのが最近出来てきているのではないかと思います。これまでの学校林は財産目的で設置されてきたということですが、新しい学校林は財産目的というより教育目的を中心に、それから教育の中でも環境教育利用ということを考え、総合的な学習の時間で利用されるという形の新しい学校林ができてきている。
遊々の森も新しい学校林の正に代表格であると思います。

【これまでの学校林】

- (1) 財産目的で設置される
- (2) 教育利用は時代によって異なる
(植林→林業教育→環境教育)
- (3) 所有は旧村単位の村もしくは学校であった場合が多い
(現在は現市町村、財産区などに移管)



【新しい学校林】

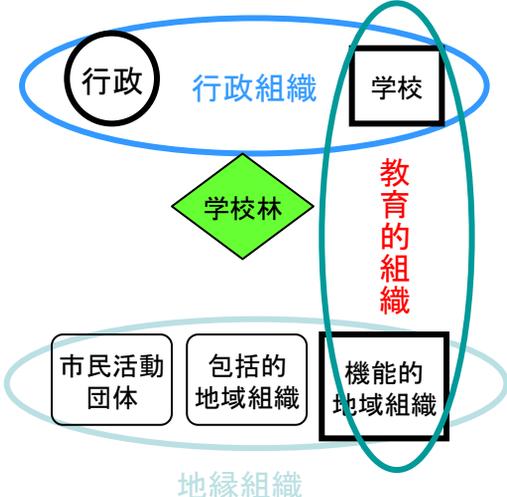
- (1) 教育利用を第一義とする
(財産目的を持っていない場合が多い)
- (2) 教育利用の中でも環境教育利用が多い
- (3) 総合的な学習の時間で利用されることが多い
- (4) 所有者は都道府県、市町村、私有地など様々
(その形態にはこだわらない)

地域主体

- 1) 学校
- 2) 行政 … (県、市、町、村)
- 3) 機能的<教育>地域組織 … (PTA、学校後援会)
- 4) 包括的地域組織 … (財産区、町内会、自治会)
- 5) 市民活動団体

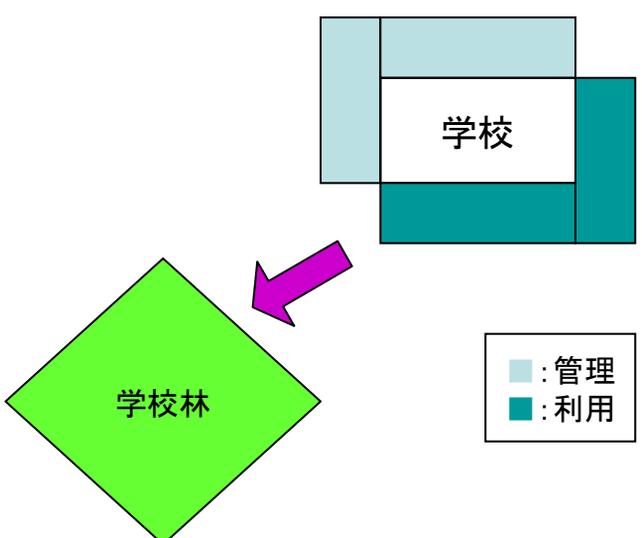
どうやってみんなで盛り立てていくかということを考えるとこのような主体が考えられると思います。
学校、行政、機能的な地域組織ということでPTAや学校後援会です。
包括的地域組織は正に場所ということだけでできている支援組織。財産区、自治会がこれにあたると思います。
それから市民活動団体もあると思います。

学校林の管理と利用



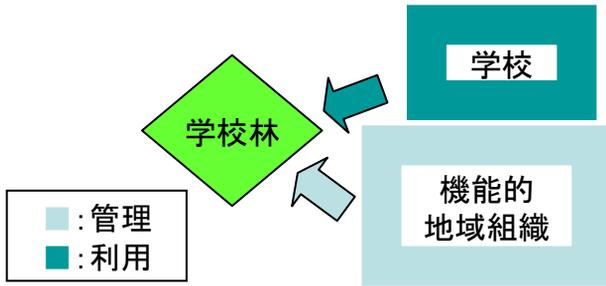
まとめてみると、教育的組織として学校がありPTAのような機能的な地域組織がある。支援組織の中には包括的な組織もあり、市民団体は支援組織より外にでてるかもしれません。
必ずしも支援だけで市民団体あるわけではないので、ちょっとはずしたほうがよかったのかもしれない。

学校林管理型：隣接



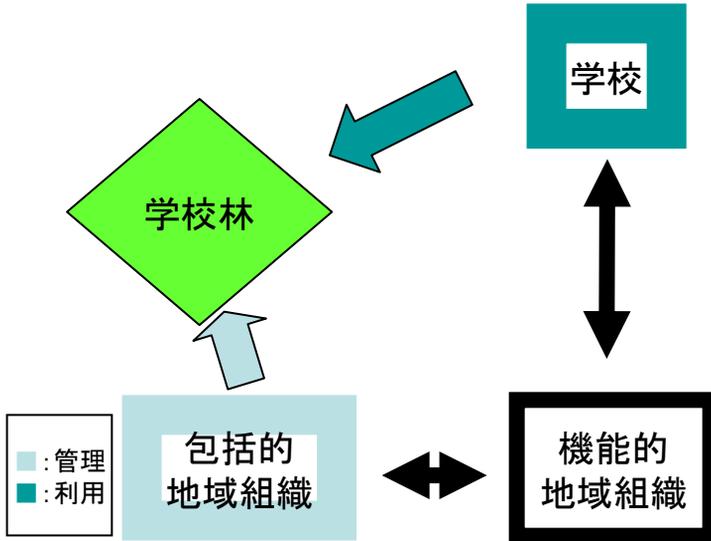
距離との関係を考えて、学校林に近い場合は学校で管理することができるわけです。
利用も勿論学校がやる。こういう形でやっていくことができると思います。

機能的地域組織管理型: 1km以内



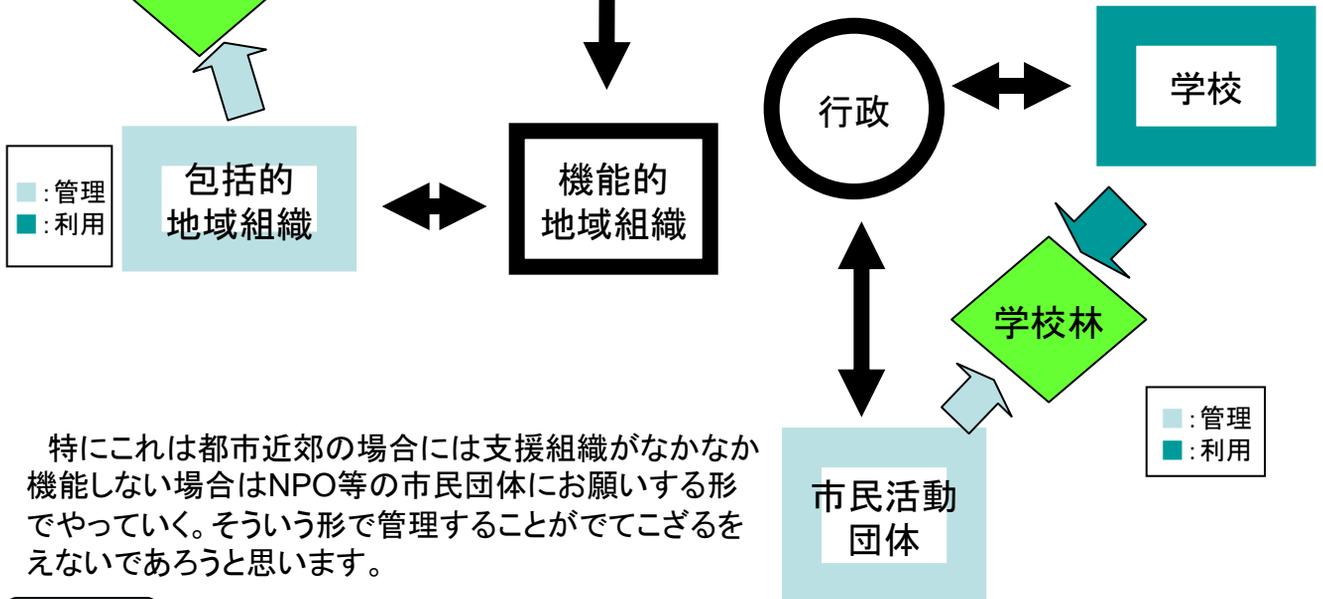
少し離れてくると学校で管理することはなかなかできないということで地域の方の援助ということが必要になってくるということで、こういう形の場合が多いと思います。

包括的地域組織管理型: 1km以上



更に離れてくると、これは地域ぐるみで守っていただかないとなかなか成り立たせることができないだろうと思います。

市民活動団体管理型: 1km以上



特にこれは都市近郊の場合には支援組織がなかなか機能しない場合はNPO等の市民団体をお願いする形でやっていく。そういう形で管理することができざるをえないであろうと思います。

まとめ

学校林で活動するためには、長期間で考えていかなければいけない。ところが学校を構成している人は主要には生徒、児童。児童の場合でも6年経ったら卒業してしまうわけです。卒業してしまうと学校林から離れてしまうというような形になる。学校の先生も昔は何年もある名物先生がいましたけども、最近は先生も移っていく。そうすると学校林を長期に渡って守っていくためには、先生にも勿論頑張っていただかなければいけませんけども、地域ぐるみでやることを考えてやっていかなければいけないだろうと思います。それがこれからの学校林を考える上で重要な点だと思います。

二つ目は木材の利用を考えていただきたいということです。リサイクルということで小さい形でもう一度使うという形の再利用でリサイクルですとかリユースというようなことで、これは私は小さい循環だと思います。もっと大きい循環では森林を入れて木をもう一度作る。

二酸化炭素まで戻ったやつが水についても森を通して流す。流すためには何を使ってるかということ太陽エネルギーを使ってまわしてるんです。この大きい流れのところまでもって行くということにぜひ学校林も一肌脱いでいただきたいと思っています。

先生方の意見交換会（第1グループ）

第1グループ

司会: 永田教授

先生: 朱鞠内(八木橋)秋ノ宮(柴田)山木屋(阿部)境(細川)
成実(田中)小田(田村)屋島東(篠原)

主催: 田中(オイスカ)石橋(林野庁)

先生) 我校の課題は遊々の森活動が年4回の単発となっていることです。本校では学校林を持っていないことで教育課程にも入れてなく、総合学習の中でも森林ばかりとはなっていないので、どうしても年4回の単発となっています。遊々の森はすぐ近くにありますが、傾斜が急ですし、森林管理署の方で伐採をマメにやってもらってないと、児童が入った場合に危険な場所です。夏はハチ等が結構出ますので、完全防備等の安全管理の課題があります。また、森林に対する教育の視点をどこにおくのか。自然についてか、森林が持つ環境面なのか、学年によって観点を整理して、学年毎に段階的に教育課程にどう森林を位置付けるかが課題と考えます。

先生) 本校は学校林が遠いため活動が年に2回程度で、主な活動は1年生が親子で植樹、他の学年は下刈りとか雪起こしなどです。また講師の方から森、川、動物のことを教えていただいたり、除伐等を体験させています。本校の課題は、学校の統合によって学校林がどうなるのかと地域の方々からも心配されているところです。また私たち職員の異動によって折角積み上げてきたものが無くなってしまうところがあると思います。うちの学校林は昭和33年から計画的に学校林として活動してきていますが場所も限られていて年々植樹をするところがなくなってきました。また児童数の減少によりこの後どう活動していくのか心配しているところです。

先生) 本校は3つの学校林があります。主に活動しているのは第2親子の森で植林や下草刈りといった活動をしています。第1親子の森はかなり前からやっていますので、手入れもしてないので来年から除伐等の手入れをしなければならないのですが、お金の問題だとか、どこに頼むかの課題が上がっています。学びの森は近いで色んな利用の仕方があります。教科とかクラブ活動で楽しむための活動もあるので、学校全体として子供たちに環境問題を考えるとか、森に親しむという大きな狙いから活用していければと思っています。まずは食べて楽しむとか、遊んで楽しむとか、そういったところを切り口としてアドバイスを受けながら、総合的な学習として自分なりの課題を見つけながら調べる、学習につなげていき、体験を通しながら学習の方につなげる計画立てをしていきたいと考えてます。

先生) 私たちの学校林は子供たちが非常に親しんでいて、昼休み時間等よく遊びに行っています。学校林の中に大型の木製アスレチック遊具が10台程あります。昭和60年に記念事業として設置されたものですが耐用年数が限界に来ています。今8台程夏休みに入る前に使用禁止になりました。撤去するにも数百万円単位のお金がかかるため撤去もできず、新しく設置するには1千万近くかかるということで、今一番非常に問題になっています。現在今後の対応について検討しているところです。学校林も樹齢80年近いアカマツで昨年立ち枯れが落ちてきたら危ないということで昨年から手入れを少しずつ町に依頼してお願いしてましたが、大型クレーンでの作業ということでかなりの費用がかかります。本当にお金の出所がないところです。また子供たちが色んなものを楽しく作った作品を卒業した後どうしていくのか？現在は既存の委員会の中で整備担当という仕事を増やすことで解決の方法を図っていますが、非常に労力の要る仕事なので苦労しているところです。

先生)本校では総合学習で遊々の森または住んでいる地域の自然で森林を大切にしようというカリキュラムで学習しています。ただ文科省からは一つの単元ではない部分や福祉教育と言われてますので環境教育と自然を含め、年間70~80時間を総合学習の時間として使ってます。本校の課題の一つは、森林教育について中学年の勉強としては成立しても、高学年は地域の文化的なものということで総合学習の制度的なものでカリキュラムに取り入れていくのは難しいという問題があります。もう一つの課題としては、今学校は昔と違い危機管理が優先なんです。子供を山に連れて行くために教師の人員配置、地域の方の協力、ヘビやハチ等の環境対策を講じているのが現状です。更に雨が降った場合は全部中断になりますので、延期するにも延期する日がとれない。しかも歩いて20分程度かかりますので、活動できる時間は1時間程度です。本当は総合の6時間分くらい使って活動したいと思うのですがトイレがないんです。簡易トイレを持ってくるわけにもいきませんし、山の中でということにもなりません。子供たちに森林を楽しめる場所として自然の中で遊ばせてやりたいと思うんですが、トイレを設置するにも資金がありません。それと先生は転勤がありますが、現在は地域の方が関わりを持ってきてます継続できています。しかし地域の方の協力が得られなくなった場合に先生のみで継続できるのか心配しているところです。

先生)本校の活動は学校林ではなく遊々の森です。4つの小学校と中学校が利用しています。課題の一つは場所です。3~4km上がったところですが、非常に急でクネクネしておりますので、子供たちを歩かせるのは非常に時間がかかります。車で行くにしても1台で行けませんし、マイクロバスも上がりきれない急な地にありますので、頻繁に行くことはできません。2つ目の課題は、ハチやヘビ、熊が出没します。安全面での体制を整えなければいけないということもあります。活動を計画する上での課題としては、活動の時間確保が難しいです。総合的な学習の時間と結びつける必要がありますが、地域の文化を継承していく特色をもっていますので、5・6年生はそちらの方を一生懸命やっています。3・4年生で森に関わる活動を考えてますが、遠いであるとか子供達がまだ小さいであるとかで活動が思うように行きません。校庭内にある築山を使って森林で学んだことを築山で同じように活動してみようということもやっていますが、職員の知識がありませんので



色んなところと連携をとらなくては活動が進められないという点で、森林管理署と森林組合とは管轄が違うのでお互いに話をかけた時にお互いに遠慮される面がありまして、どっちにお願いしたらと思ったりするんです。

先生)本校がすごく恵まれているのは学校の運動場のすぐ横にみんなの森という学校林があることです。子供達が日常的に休憩時間に遊ぶとか、何かの学習で森に出かけていくことができます。子供達が遊べる範囲は狭いのですが自由に行く事ができる恵まれた森があります。そこで休憩とか観察とか材料集めとか、総合的な学習のテーマを成実の自然を見つけようということで、自分たちの森から出発して、色々木の事調べたりとか名前を付けることで、プレート作りに取り組みました。それからカブトムシの事とかサケのこととか色々なことが繋がってきて特に計画したわけではありませんが色々偶然に広がってきてとても満足した活動ができたなと思っています。課題としては、担任に任せられている部分があるので、この学年でこれってものがないので、担任とか子供たちで考えて活動を組んでいくことが多いので、今後どうやってこの森に関わっていったり、自然の森の状態を残しながら子供たちの楽しい活動ができたらと思っています。

司会)一通り発言をしていただきましたが、今までの発言で色々ご質問があると思いますが、どうですか？
これはもう少し聞きたいとか。



田中)学校林活動を継続していくということについての提案なんです。私たちオイスカでは山梨県で学校林活動を推進してきましたが、先生方と同じ悩みを持っておられて、そういった中で学校林検討委員会を先生方だけでなく、行政の方や地域のボランティアに入ってもらいチームを作って活動してきました。私たちはその地域に運営的に存在している団体ですから転勤というのはありませんが、行政の方や先生方は転勤ということで、どうしても継続ということが困難で、意識のある先生が、熱心な先生の時はずっとも活発だけでもという問題もありますし、また、山は継続して手を入れなければ維持ができないところがありますので、そういう意味で委員会形式を取り入れて、私共オイスカや行政及び地域の自治会の方たちでチームを作りました。そうしますと先生方が変わっても学校林活動の継続性が生まれてくるのではないかと考えます。また総合的な学習の中でそれだけをやってられないというお話がありましたが、次に提案させていただきたいのが、私は森の中には地域の文化があると思うんです。探していただくと必ずその名前を付けた何とかなの森っていうのがもしあったとしたらその名前がなんだったのか地域の部分を掘り下げていくと、そこに文化があったり、それからもう一つは、森林とか生物とか植物とかの理科系だけでなく、森の中でコーラスの発表会をしたり詩を書かせたり短歌を作らせたり、もちろん絵を描くことは森に入ればいくらでも描けます。ですから総合学習だけでなく、そういったことでフィールドを使っていく。距離の問題であるとか課題はありますが、いくつかの教科をまとめて時間を調整していくようなことで、地域の方との関わりも取り入れていただくといいのかなと思います。

先生)図工の学習の時間で使ったりとか、絵を描きに行ったりとか、そういうのではよく使っています。すぐそばにあるからすぐに行けるのでそういうところはいいです。

先生)うちも近くにあるので低学年の子供達が基地を作ったりして、そこに作品を作って飾ったりして幼稚園の子供を呼んできて見せたりとか、そういうふうにしてやっています。

田中)御提案したいのは、先生方が一生懸命頑張ってるって、先生方が頑張りすぎると続かなくなりませんかということで、楽できる方法と言いますか、単なる森の林業というところだけではないフィールドとしての発見をしていただくともうちょっと使い勝手が良くなると思います。地域の方や行政の方と仲良くしていただくと、例えばここは林道だから通っちゃいけないだとかいろいろあったりする時にも、行政の方がそこに入ってくださいと知恵を授けていただけます。

石橋)山ということで一般の人は全く知らないのが普通の世界なので、そのような中で我々ですと森林管理事務所とか、森林組合と森林管理署との話もありましたけども、あと一番身近なところは市町村の産業課などの林業を担当しているところがありますので、そういうところに少しでも話をかけていただければ、色んな助成のタイプがございますので、市町村で持っている場合もありますし、緑の募金では県のほうで持っていますので、そういうこともご相談いただくと、助成という意味では一番早く進むと思います。国有林が近くにあれば森林管理署の方にお声かけいただければ、お手伝いしたいという方が多分たくさんおられると思いますのでぜひ声をかけていただければと思います。

司会)学校林というのは文科行政と林野行政の間にあるようなことで抜け落ちてしまうことがあります。やはり学校の先生方は文科行政なので、なかなか林野行政の情報が得にくいと思います。どこにいったら情報を得られるかという、やはり市町村の農林課というようなところに聞くのが一番近い気がします。それから森林組合というのは森林所有者の協同組合となってま

すが、実態的に市町村の方が事務を取り扱っていたりと、かなり行政に近い面も持っていますから、森林組合にもあたっていただくというのがいいと思います。もちろん森林管理署が近くにあれば森林管理署にあたるというのもいいと思います。課題を整理するというので、まずハード面の課題で、学校林が学校から遠いことを上げられているのが2校ありますけども、多分他の学校でも遠いというのが課題という学校も多いと思うのですが、このあたりいかがですか？

先生) 遊々の森は近いと言っても行くまでに1時間以上かかるので、小学校の教育活動をする場としては不適切な場所ということになってしまいます。森林管理署の方が話を持ってきてくれる時はやはり近い場所をいただきなと思います。また、私の県では近くに遊々の森で活動している学校がないので情報交換が出来ません。学校同士が声かけるというのはなかなか難しいです。近くに3つの小学校が一緒に活動すればとは思いますが、我々から声かけするとボツになる可能性が高いので、森林管理署の方から、何かいい条件を出していただいて3つの学校が活動出来たら森林環境教育の活性化にもつながるような気がします。今日の活動報告や意見交換でメリット面がかなり聞けたのでそれを情報として活動する小学校を増やしていただければと思います。

司会) 距離は交換できればいいんですけどね、難しいですよ。

田中) 距離の問題で、今、里山にある民有地には手入れが行き届かない森林が数多くあります。そういうところに学校林の代替地みたいな感じでやれる森林を作ってくださいと私共県とか市とかに申し上げているんです。なかなか実現しませんが、民有地の管理を問い合わせさせていただいて、県や市町村が動いてくれると意外と出来ると思います。学校のために市で買い上げて使えるような力強い助成システムを作っていただくと意外と出来るのではないかなと思うんですけども。

司会) 千葉県では教育の森という制度があって、県が地主と契約するというようなやりかたをやっていますね。あと長野県飯田市も、あそこは学友林という言い方をするんですが、市内の全小学校が学友林を持っているというのが市の方針にあって、そういう形で新しい学校林というものをやっています。やはり近いところということが大きなポイントとしてあるように思います。そうすると情報の交換もできるということです。お互いに学校同士の情報交換もやっていく必要があるでしょうし、それから行政との連携を深めていくことも必要だと思います。

先生) 今思ったのですが、町内に小学校が2校あって、2校とも森林管理署のほうで出向いてそれぞれの場所でもって森林教室やっています。ですが情報交換ということでは、どちらの小学校でも情報交換できてません。情報交換によって連携にもなると思いますし、もう一つ思ったのが森林管理署が管轄するのは国有林であって大学の演習林というのは大学の管轄ですよ。我々はどこまでが管轄がどうなのかということにはわかりませんが、大学の演習林で森林教室をやらせてもらえたらまた違った内容がやれるのかなと思いました。そして森林管理署のほうはとて一生涯懸命やっています。先日もやった後で、最後は暑かったのでジュースをいただいたのですが、それが紙で作ったペットボトルで、カート缶と言うのかな、初めて見たんですけど、あーこんなものもやってるんだとわかって、だからネタとしてはすごくいいものがありますので、あとは我々が受け方をどう整理するのが重要だと感じました。

司会) 今演習林の話がでましたけども、実は昔、ある小学校がうちの学校林は東大の演習林ですってということがあって、どうなってんだろうと、そうしたら当時は演習林の技官の人がその小学校と契約して教室やっていたりして中に入って野鳥観察をしたり色々な事やってりして、ずっと継続的にやってるということがありました。ですから演習林の中でもそういうことに関しては、そういう人と繋がりをもっていただけたらいいんじゃないかなあとと思いますね。

田中) 今日の情報は結構力になると言いますか、森林管理署や市町村のような機関は特に親切です。ですから、そういうところに投げかけて、こういうことがやりたいんだけど手伝ってもらえないだろうかということをはなさんと今結構動いていただけたと思います。先生方はものすごく忙しいと思うんです、実際には助成金あっても出す助成金の書類は非常に多くてややこしいですから、それでいらないと言いたくなるくらい面倒なものがありますから、ぜひ行政の人達と仲良くなっていただいてハンコ付けばいいような書類を作ってくださいの方が必ずいらっしゃいます。本当に林務行政の方々は結構ご熱心な方が多いもんですから、そういうものをうまく活用されると、今こんなことやりたいんだけどって相談されると結構手を貸していただけます。ぜひ乱暴ですけども楽をしていいことができるような情報交換をしていただきたい。私どもも森づくりの専門家ではないんですが、でも今は大概そういう方がおられますので、そういったことで学校林の先生方のお手伝いができているところです。

先生) うちが学校林ではないんですが、年に2回自然体験活動ということで登山に行くんです。春は森の案内人の方が付いてきてくださりアカマツ・トドマツの違いとか珍しい花や草の話とか、ちょうど雨が降ったのでブナの木が水を根元まで集めて、雨水を枝を伝わらせてる様子とか見れて感動して帰ってきたんですけども、そういった時に現地で弁当を食べて帰ってくる予定でしたが、雨が降ったので降りてきたんですが、それでも3時間4時間でしたので我慢してたって子が多かったみたいです。学校林で活動する時は簡易トイレがあることは一番望ましいとは思いますが。

司会) 学校林のある学校で学校林活動をやっている先生方が異動で学校林がない学校に行ったらどうなるのでしょうか。

先生) 私は教師というのは、それぞれの地域の中でどれだけ最善のことを尽くすかということだと思います。漁村であれば魚とかに関することをやるでしょうし、山であれば山のことを、その勤務の間は山のことをやっても違う環境に行ったら違う環境に合わせるというのが最善のことだと思います。大事なものは森林というものと違うもの、例えば水産業とか違うように見えるけどもそこで伝わるものはなんなのかと、そこをもっていくのがやはり教師なのかなって私は考えます。

先生) 私も同じような意見ですが、前は森なんか関係ない町の中の学校で、自分の意識の中でも本当に例えば森の学習が出てきてもそんなに深く学習が出来ないとか関われない部分がありましたけど、今は学校林や森のある学校ですから、子供と一緒に感動することが多くて、もし次の学校が無かったとして森の学習は今のようには出来ないけれど自分の中で森への意識が変わってくるので子供たちとなにか違うという学習もそこに結びつくことがあるのではと思っています。

先生) 森というのは手段であって、低学年は森を知る、それが学年をおって環境だということになり、それを知るための、森が近くなって森に入るという環境はあるけども、そこは違う環境では、例えば工業地帯の学校であれば、そこから環境に対してどのように入っていくのかということだと考えます。

先生) 学校林が何十年も続いていることを考えると、地域の人達が思いをもって学校林を築いてきたのかなと思います。私たちが住んでいる地域の緑を増やしたいということでやっています。学校のために何か役に立ちたいとか子供たちに何か伝えたいという思いがあってこそ学校林が続いてきていることを教えたいと思って活動をしてきました。

司会) ハードの問題にしてもソフトの問題にしても情報をもっと集めてネットワークをどうやって組んでいくのかということで突破口を考えていくということが重要なのではないかと思います。

先生方の意見交換会（第2グループ）

第2グループ

司会：大久保教授

先生：三和(森川) 橋野(今西) 広陵(内藤) 菅守(安藤)
旭(吉田) 河内(和田) 託麻原(西橋)

主催：加藤(オイスカ)



司会) 今日お互いに悩みを出し合って何か参考になるものを持ち帰ってもらえればと考えております。実際、教育現場は大変だと思います。小さな学校は別の問題として、中規模校では地域力、家庭力の問題といえますか、学校に委ねられる事がたくさんあります。学力低下とか正直な話学校林どころではないのではとも思いますが、学校林活動を効率よくするにはどうしたらいいのか、お互いの悩みを出し合って今日は話し合いをしたいと思っております。

先生) 学校林を運営する上での問題点としては、何か活動をするとお金がかかります。うちの学校では随分前に整備された樹木会計があって、学校林に関わる除草剤、芝刈り機、チェーンソー等を樹木会計により購入しました。しかし運営資金については、ありません。樹木会計を順次使っている状況です。今後学校林を整備していく資金が問題点になると思います。今はPTAで活動を手伝っていただいたり、今年度からは町の森林組合や外部の団体にも協力していただいています。教育課程については、森林教室又は学校林活動の評価をどう位置付けるかということで、総合的な学習の一つの柱として活動しているところです。総合のカリキュラム位置付けて運営しているところです。今のところ問題は見当たりません。

先生) 昨年まで小学校は小学校中学校と一緒に24名いたんですが、中学校統合で8名になりました。そのため学校林の管理が子供たちと教職員と保護者の協力で植樹活動はなんとかできますが、下草刈りや枝打ちといった活動は厳しくなってきました。学校の規模が小さくなったために活動の規模も小さくしていかなければならないという課題があります。教育と関わる部分では、学校林が学校から車で20分程かかりますので、そう頻繁に行ける距離ではないので、学校林での活動は距離の関係で、私自身は物足りないと感じています。

先生) 本校は全校児童が260名程で、30年前に出来た小学校です。正式には学校林ではありませんが、校庭からすぐ入れる所にある市の緑地を30年前に自然観察林という名前で始めてます。しかし次第に入らなくなって忘れ去られて、看板はかかっていますが、ほとんど利用されなくなりました。所有がはっきりしていないので、今でも木を伐っていいのか、道を作っているのか、手を入れる時には市の方にお話をして活動しています。長い期間利用されてかったので、18年度に何とかしようということで、色々な方々に相談をかけて始めました。正式に学校林ではないので、学校のお金も使えないし、市の方からも出ないということで、県の森林課の方とオイスカの方と一緒にやらしていただいて、整備の時に松下電器さんに補助していただいて整備してきました。運営資金がありませんので、色んな補助金を申し込んだりして活動しています。教育課程の課題では、ずっと使われなかったので先生方の意識がまだ統一されていないところです。ですから教育体系に基づいた利用方法、カリキュラムの位置付けがまだされてませんので、思い付いた時に思い付いた事をやるという状況です。

先生) 学校林での活動は、1・2年で生活科、3年以上で総合的な学習の時間を使って活動してますが、総合的な学習の時間の狙いを考えた時に、それまで各領域で学習してきた知識を総合して使いながら子供の問題解決の力を伸ばしていくというのが本来的な趣旨だと思いますから、それを学校林という素材を使うと非常に時間がかかります。例えば樹木のことを調査するにしても1限から通してやらないと、なかなか子供の成長が見られないところがあったり、自然が相手ですから季節があるので、この時期にはこういうことというのが決まってきます。そうするとそれと合わなくなってきたりして実際の時間数が確保できなくて尻切れトンボに終わってし

まう、本当は子供たちにじっくりと活動させて、そういう子供の能力を伸ばしたいんだけど、なかなか時間が確保できないということ。それから素材はたくさんあるけども、それを先生が知らないという問題があります。山の素材に対する知識が非常に困難で、本を読んだだけでは分からない。例えば、この木は何だと聞かれてもなかなか答えられない。子供に何を学ばせるかを考えた時に、先生の授業を展開していく力が必要であるし、私たちの力だとうまく回っていかないのが現状だと思います。この素材はこの月にという一覧はあるけども、それをどう使っていったらいいのかというのが1年間のカリキュラムを通して活動していくことが難しいです。それから維持管理ではと、今子供が全校で20名、将来は1桁になってしまう心配もあります。父兄の方や地域の方も人数が少なくなって協力を得るにも大変になると思います。今は年2回間伐とか森林の整備をやってますが、それ以上は増やせないと思いますし、本当はもう少しやりたいところがあるんだけど人数が少ないんだから、地域も非常に協力はしてくれるんだけど、思ったようにはいかないなと。すべてが無償の奉仕でやっていただいているので、お金も必要だと考えとしてはあります。

先生) 本校は児童が600人弱の学校です。今も増え続けている状況です。課題としては、学年毎の活動は出来るますけども、全校で活動するには色々と準備や手間がかかってしまい、オリエンテーションもやっていますが、かなり窮屈な状況です。場所の確保などに対して心配されています。それと色んな教科とか児童会活動での利用をしていますが、授業数が厳しくなってきたり授業も充実させなければならぬということで、活動の広がりをこれ以上作ろうとした時にどんな教科でどんなことをやったらいいのか、具体的な活動例が分からないので、区切られた時間内でというのが本校の課題だと思っています。ここ7・8年の間に看板を作ったり机や椅子を作ったり巣箱を作ったり樹木に名前を付けたりといった活動はしてきたんですが、それ以上にこれだけの人数でみんなが楽しめるような活動の具体例を学ばせていただきたいと思えます。

先生) 本校の学校林は6年前にNPO法人里山倶楽部の弘川寺の里山保全活動を炭焼きや伐採など色々な活動を子供たちに体験学習させたいということで始まりました。今は月一度町の保全活動ということで町もバックアップしていただき、千年の森部会を設立して、地域の方や学校も入ってます。少し予算をいただいているので、ノコギリ、カッター等使うものはそこから出していただいたり、維持管理は里山倶楽部の方々が本当に手弁当で下草刈り等の学校林活動をする前の準備をいただいています。活動は3～5年生で、6年生は植樹という形で学校林に学年毎に上がっています。1・2年生は校庭内にたくさん森林があるので、そこで生活科や木に名前をつけたりは可能ですが、バックアップがないと学校林での活動は難しいと予想されますので、それが課題です。活動の継続については、やりたい先生がやりたい時にやりたい時だけやるというところから始まったんですが、それでは続かないということで、カリキュラムで3・4年生では間伐を経験し、6年生で植樹という流れは作りましたので、職員は転勤があるので活動をファイルにして残すようにしています。教育課程の課題は、総合的な学習の狙いとするところの問題解決能力、生きる力はなかなか出来てませんが、森で楽しかった思い出を作ることが生きる力に、人と出会って一緒に何かをしたり山の先生の生き方を学んだりすることが生きる力になるということで今やっています。



先生) 本校は全校児童840名、1学年平均4クラスあります。1クラスは40名近くいます。校区に田や畑が無い街中の学校です。学校林は2時間も離れているところに所有しています。20年前に緑の少年団が先生と子供たち保護者の方が植えて、1年に1回細々と続けてきた活動です。学校林があることさえ知らない人達も多いし、何か街中の子供たちのために活かす事ができないかということ、何か出来ることということで今少し力を入れてやっています。4・5年前

から緑の少年団が結成して20周年近くなるということで、間伐とか色んな活動をしてきましたが、少年団の子供だけが活動するのではなく、学校に帰ってそれを広げる、伝えることに力を入れているところです。それまでは手弁当で行って保護者のボランティアで下刈り、枝打をやってきたような状態でしたが18年度に県税を利用した助成を受けて、森林組合に森林整備していただいたところです。教育課程には位置付けることはできませんが、学校林で学んできたこと、体験してきたことを児童集会で少年団として学校林の紹介をすることで広げるという活動をしています。

司会)それぞれ条件は違うと思います。小規模であるとか都会にはあるが実際の所有はどこかわからないとか、それぞれ条件が違うわけです。そういう条件の中で学校林活動をしているわけですが、今の学校教育課程に位置付けるために、お金の問題が非常に大きいと思います。学校規模が小さくなればPTA負担ではできないと、第三者と言いますか協力者からできれば支援してもらいたいと、こういうところですね。お金の問題で、何かお互いに質問をしたいということはありませんか？また指導者の問題もあると思います。どこの学校でもそうですが、充実した活動にするのは指導者の力量が必要だと思えますが、指導者の問題いかがでしょうか？実際教育課程に入れた場合ですね。指導者の問題と学校の中の問題と絡んだ場合いかがでしょうかね。

先生)簡単なことは職員でもできますが、間伐とか専門的な話になると素人では絶対できない。やはり関係機関にお願いしてプロの方の力を借りないとできないと思います。うちは学校林だけじゃなく遊々の森でも去年活動しましたが、その時は九州森林管理局にお願いして実際に森の中の探索や説明をやっていただきました。専門家の方ですからとても詳しく話してくださるし、色んな作業も見せてくださるのでとても良かったと思います。学校の先生方はそういった機関との間をうまくコーディネートすることを考えて、協力をお願いすることを考えていくといいと思います。今の時代は色んな企業さんでも環境に取り組みまれてますので、そういったところを開拓していくと非常に有効かと思えます。

先生)昨年度炭焼きをやったことで、昨年冬に森林組合の方がわざわざ学校に来てくれて何か手伝えることはありませんかと言っていました。その話が膨らんで今年度は学校林の間伐材、トドマツなんですけども、チップにできませんかとお願ひしたら、いいよってことで、チップ工場にも連絡していただいてチップにしてるところも見て、触って、運ぶのも森林組合のトラックで3往復位してもらって、遊歩道に敷くときも手伝っていただきました。こういう繋がりがから学校林を進めていくしかないかなというのを感じたここ1年でした。

先生)私も人との繋がりで活動が成立していくというのが実感です。学校林活動は発見が一杯だと思うんです。山に何回も足運んで色んな人と沢山出会うと色んな話をするので私たちも大切さを本当に実感できるように、子供とにかしたのかというのは見えてくると思います。学校林活動を継続していくことで職員も学べるし、子供たちも色んな経験ができて、特に子供は山に入るととてもいい顔をするんです。学校林が始まるまではゲームしたり喧嘩したりギスギスしてたような感じでしたが、山に入るとすごくいい顔して楽しそうな顔して、友達と楽しくニコニコと会話してるんですね。子供がイキイキとして楽しそうにしてる姿を私たちも見ることで、継続してやっていきたいと思えます。やはりボランティアで350円位の給食だけで仕事休んでいただいてやってもらっているの、本当に申し訳ないなあと、甘えさせてもらって活動を続けてるんですけど、予算のこと、継続させることと予算のことが本当に切実な願ひです。



先生) 続けていくにはどうしたらいいのかと思ってます。同じ山のプロを何年間かお願いしてますが、そうするとその方も子供たちも親近感がでてきて、来る度に仲良くなってます。先生方も同じ先生が来るので、より親しみやすくなってますけども、人事異動でぱっと変わってしまうと後を継ぐ人がいなくて、また1からということになってます。



司会) 周りの支援、サポートが必要ということですよ。今ここにおられる方は行政機関との連絡がある程度とれるからいいけども、学校林がない学校の先生達は学校と行政は関係ないと考えていたのは事実ですよ。行政の人と連携がとれないと、学校林の活動というのは輪が拡がらないわけですよ。県の人に来てくれたから始めたという形ですよ。実際問題としてどういう手立てでやれば活動資金を補助してくれるかってことを知らないですよ。行政とか第三者から、こういう方法があると、教育課程にうまくあえば、指導者もいるよと、ということになれば継続していくわけですけどね。それから、熱心な先生がいると継続していくわけですけども、ところがその先生が人事異動でいなくなるとそこで中断することはないですか？

先生) 木に古い名札が付いていますので、好きな先生がいた時はおそらくやっていたと思います。やはりそういうことを避けるために地域の人を巻き込んで教員が変わっても、地域の公園なんかを管理されてるグループの方とか、それから県の方を入れて保全委員会を立ち上げました。学校と地域と行政とオイスカの方にも入っていただいて、NPOの人達にも入っていただいています。だから今度は途切れることはないと思ってます。そういうはっきりした場があれば続くんだと思ってます。

司会) 今の話は委員会を作って、そして校長が変わろうと変わるまいと学校として委員会という組織の中で動いているから継続はありうるわけですね。次に中身の問題ですが、総合学習の領域で考えた場合にどうですか？先生方満足されてますか？

先生) 内容の行き詰まりということで、我々の感覚としてメニューが決まってくると思うんですよ。それを広げるようなメニューを考えつかないと、もっと奥に入って遊歩道作るかみたいなどころまでしか入ってないんですよ。そのあと一体どうするのみたいな。虫探すとかね。やっぱり行き詰まりというようなものを感じます。

司会) 内容の発展性の問題ですよ。例えば4年生が間伐した材料で何か作ると。それはそれでいいことです。でも他にはってことで内容を考えた場合に、もっと発展的な問題ですね。例えば大きい学校林はいいんですが、小さい学校林は間伐したらなくなってしまう。来年どうするの、伐るところはなくなってしまうという悩みがあります。

先生) うちの遠いところにあるので、頻繁に活用できないのですが、学校林で学んだことを他の子供たちに広めたいのかというと、都会の子供たちに森に興味・関心をもってもらいたいというのが一番なんです。そのきっかけになれば思ってます。少しでも森に関心を持つ、それがひいては環境に関心をもつということに広がっていけばいいかなと思ってるんです。だから間伐を体験する必要もないし、できないところも一杯あるわけですから。お金が無い、学校林が遠い、そんなのもう悩んでもしょうがないことなので、いまある現状をどう活かすかというのを考えているところです。私としては他の教科と繋がりを持たせて効果の上がるようなやり方で授業を進めていきたいというも考えています。校庭では総合的な学習で3年生は校庭の樹木・植物を観察するという授業をしています。森林管理署から来て頂いて校庭の樹木の説明をしていただくと同時に森林教室を開いています。5年生では宿泊教室に行く関係で昨年からは遊々の森活動を入れました。社会科で森林体験、実際に山で見たことと教科書で学習することが結びつくことで効果が増すと考えています。

先生)うちは学校林が0.8haくらいの広さで小さいので、生活科にしる総合的な学習の時間にしろ、ある環境の中で子供達が精一杯出来ることをしていく。うちの場合は隣にあるので毎日行けるんですよ。毎日行けるといい良さを使っていくという方法をとっていきたいと考えてます。広くない場所でも、それなら出来ることを考えていくことが子供にとって生きる力なり総合の狙いに通じるんだろうと思ってるんです。

先生)学校林の活動が、総合的な学習の時間、今までならったことを利用する時間とは言いながら、学校林の活動そのものは新たに知識や技術を獲得しなくてはならない。必ずそこに難しさがあると思うんです。例えば工作をするにしても、ノミを使うのは子供はその時間初めての技術で、それを獲得しないとできないだろうし、野鳥観察や樹木観察でも教科書には載ってないことなので、生態そのものも新しい知識を自分で獲得していかなければならない。そういう負担があるので面白いのですが子供たちはそういう難しさがある、あるいは私たちもそういう難しさがあるので子供は喜ぶんだけど最終的に尻切れトンボになったり、広がっていかないと、同じような活動になってしまうとかそういうところがあるのかなと思います。それをどこでどうやってクリアしていけばいいのか、これから考えていかなければならないと思います。

司会)結局それぞれ条件、環境が違いますから、その条件に合った、その環境に合った学校林の活用を考えなければならない。ですから木が沢山あって伐採するというものを生かすのも結構ですし、そうでないところであれば、そうじゃない活かし方を結局ここに来てる先生方1人1人がそういう意気込みでやるのが重要だという結論ですね。資金の問題、内容の問題、環境を活かした学校林活動をする。そして継続するためには委員会など設立して維持していくというところでよろしいですか。そして行政などの協力なくてはダメですということで締めたいと思います。



★第1グループのまとめ(発表者:永田教授)

第1グループのまとめということで、ハード面の課題としては、学校林が遠いので使いにくいという意見が出ました。それから、継続性の問題についても非常に悩みが大きい。それから安全性の問題をどう確保していくのか。そういったことが問題点として上げられました。

それに対して例えば遠いところにあることを解決しようとしても学校林を近くに持ってくるわけにはいかないで、一つのやり方としては、近くにあるものでそれを置き換えるということです。具体的に近くにある森林で使えるところを使う形に変えていく、あるいは学校の中の緑地をそれに代えていくことができるだろうと思います。また、情報をどうやって手に入れていくかということについて、学校林活動を一生懸命やっておられる先生方、あまりに一生懸命やるために疲れてしまうということではかえって続かなくなるでしょうし、楽できるところは楽をする、学校の先生方は忙しい訳ですので、やっていくことができないわけです。こういったところは、学校林は文科行政と林野行政の狭間にあるわけで、森林をどうやって管理していくのか、森林をどう使っていくのかについて情報を得るように情報交換を進めることが大事だと思います。情報交換のある場所としては、一つは国有林の営林署・事務所というような所があります。国有林はプロですので、こういったところからも知識を得ることができます。それから公立の学校の場合は、市町村から知識を得ることもできるでしょう。それから森林組合からもこういったノウハウは受けられるはずです。こういったノウハウを得て楽をするような方法を考えていただきたいということです。

それから、学校の間での情報交換をもっと進められてもいいのではないかなと思います。

安全の問題についても、こういった所からの情報を得ることによって回避することができるでしょうし、実際にそれを行うための助成金を得るためにも、こういったルートというのは使っていくことができるのではないかと思います。

色々な課題が出てきたんですけども、私からのまとめとしては以上にしたいと思います。

★第2グループのまとめ(発表者:大久保教授)

最初に一番の問題はお金の問題です。それぞれの学校の立場がありますけども、学校が小さくなれば、例えばPTAでまとめたものが払いきれないとか、何かするにもお金がかかる。そういった場合に大事なところはやはり公的な機関ですか。その県とか市とか。あるいはオイスカさんを通じて民間の力を得るとか、そういう財源確保が非常に問題になるということですね。ただ財源確保の問題の中で、学校林の輪を拡げたいという場合に、学校林を現に持っている学校はもっと多いわけです。実際に学校でもなんとかお金を得たい。学校の先生はお金がどっから出てくるのか分からない先生が多いです。ところがある小学校では県のほうから積極的にPRがあったから非常に助かったという話があるんです。学校の先生はお金については変な話ですが無知なんです。ぜひ行政機関あるいは民間の機関でこういうお金が使えるだとか、こういう補助金があるというようなことをPRしてもらおうと非常に楽なんです。

また、実際に小学校の先生が中心ですから、小学校の教科は8教科もありますから、道徳があります特別活動があります色々な面があります。そうした場合に学校林の専門的なものについてはとてもまかないきれない。そうしたそういうところでも地域あるいは行政の人達がこういう先生がいるがどうだっというPRがほしい。そういう結論でございます。

なお、学校の内容については、それぞれの学校の立場、立地条件、環境がありますから、その環境に合わせた学校林の活動をするしかない、ただその環境をより良い物にしていくという先生達の意識が高まると継続していくんじゃないか、更には発展するんじゃないかと。そして学校林の活動が継続するためには委員会組織をつくるとうまくいくのではないかと、地域の人、行政の人、学校の先生交えた、そういうふうな組織をつくると、委員会をつくると。この校長のときは良かったけども、次の校長の時はなくなったということじゃなくて、学校に組織を持つてるわけですから、継続するわけですね。そういうふうなことをすると継続するだろうと。主なことは話されましたので報告しておきたいと思います。



国民の森林・国有林
林野庁

森林で遊んで、学び、楽しむ 「遊々の森」

「遊々の森」は学校などが森林管理署等と協定を結ぶことにより、さまざまな体験活動や学習活動を行うフィールドとして国有林を継続的に利用できるようにする制度です。

森林の利用を通じて、子供たちの人格形成や、幅広い知識の習得を行う森林環境教育の場として利用していただけます。



「遊々の森」の概要

《実施主体》

学校、都道府県、市町村、教育委員会、学校法人、団体など

《募集方法》

森林管理署長などとの間で、安全確保などの措置や費用負担、有効期間(5年以内、更新可)などを含めた協定を結びます。

《活動の内容》

●森林での遊び

ネイチャーゲーム、丸太切り(間伐、除伐材利用)、木工クラフト(間伐、除伐材利用)、隠れ家作り(ツリーハウスなど)、つる細工、炭焼き体験、沢での水遊びなど

●森林学習

植生調査、森林調査(樹高、直径)、土壌調査、野生動植物観察、昆虫採集、きのこ栽培(ほだ木置場)、林内栽培など

●林業体験

植林(針葉樹・広葉樹)、下草刈り、枝打ち、除伐、つる切り、保育間伐など

以上「遊々の森」では、森林内でさまざまな活動ができます。

また、森林管理署が、活動プログラムの提供、指導者の紹介、必要な情報提供などについてお手伝いします。

「遊々の森」のお申し込み・お問い合わせ

①北海道森林管理局

指導普及課・・・TEL011(622)5231
<http://www.hokkaido.kokuyurin.go.jp/>

②東北森林管理局

指導普及課・・・TEL018(836)2192
<http://www.tohoku.kokuyurin.go.jp/>

③関東森林管理局

指導普及課・・・TEL027(210)1158
<http://www.kanto.kokuyurin.go.jp/>

④中部森林管理局

指導普及課・・・TEL026(236)2531
<http://www.chubu.kokuyurin.go.jp/>

⑤近畿中国森林管理局

指導普及課・・・TEL06(6881)3419
<http://www.kinki.kokuyurin.go.jp/>

⑥四国森林管理局

指導普及課・・・TEL088(821)2000
<http://www.shikoku.kokuyurin.go.jp/>

⑦九州森林管理局

指導普及課・・・TEL096(328)3600
<http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/>

⑧林野庁

国有林野総合利用推進室・・・TEL03(3503)2038
<http://www.kokuyurin.maff.go.jp/>



<オイスカとは>

財団法人オイスカ（以下オイスカ）は1969年に「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界を目指す」というオイスカ・インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア・太平洋地域で農業開発や環境保全活動を展開しています。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した各国の青年は、それぞれの国で農村開発に取り組んでいます。また26の国と地域において、子供たち自身が、学校の敷地や隣接地で苗木を植え育てていく実践活動を通じて「自然を愛する心」「緑を大切に作る気持ち」を養いながら、地球の緑化を進めていく「子供の森」計画を展開しています。国内では農林業体験やセミナー開催などを通じての啓発活動や、植林および育林による環境保全活動を展開しています。



<学校林活動への取り組み>

現在、約3000の小・中・高校が保有している学校林は、昨今、森林がもたらす教育的効果を十分に得られる最適なフィールドとして見直されつつあります。しかし、いざ学校林を活用しようとしても、森林に関する知識や荒れ果てた学校林を整備するための資金がない、誰に何を相談すればよいか分からない、などの問題を抱えている学校が多いのが現状です。

オイスカは2000年より子供たちが里山で自然に親しめる環境づくり、及び学校教育における森林活用を推進するために学校林保全活動を始め、松下電器産業株式会社などの企業や国土緑化推進機構などの助成団体の支援を受け、林野庁や地元自治体、林業関係者、地元の方々と学校を結び調整役として活動を展開してきました。7年目を迎えた現在、山梨、東京、神奈川、岐阜、愛知、兵庫、富山にある合計15校の小・中学校において、荒れてしまった学校林の整備活動や、学校の児童たちによる学校林での下草刈り・苗木の植え付け等の自然体験学習等の実施協力、それらの活動が持続していけるよう各学校に「学校林検討委員会」のようなものを立ち上げていただき教育現場での体験学習のサポートを行ってきました。

近年、子供たちを取り巻く環境の変化により体験を通じて学ぶ機会が減り、自ら課題を見つけて考えてゆく力や、心身のたくましさや失われた子供たちが増えていると言われています。森林（自然）の中には子供たちが、両親や年長者から、その関り方や活かし方を学べる様々な条件が散在しています。オイスカでは自然における原体験は、健全な社会を形成する大人への成長を助長するものであるという考えに基づいて展開しております。これからも、更なる活動の広がりや、各学校林に関係する方々が協働して活動を継続することによって、地域全体の「ふるさと」として守り、育てていけるよう進めていきます。

《お問い合わせ・連絡先》
〒168-0063 東京都杉並区和泉3-6-12
財団法人オイスカ 組織広報部
Tel 03-3322-5161/ Fax 03-3324-7111
E-mail oisca@oisca.org
URL <http://www.oisca.org/>



<松下電器の社会貢献>

「企業は、社会によって支えられ、社会と共に歩むもの」と考える松下電器は、創業当初から健全な社会づくりと豊かな住みよい環境づくりをめざして社会貢献活動を展開してきました。

一昨年から昨年にかけて、今後の松下電器の社会貢献の方向性を検討し中期計画を策定、「育成と共生」を共通テーマに、「子ども」「環境」「福祉」を3つの重点分野に定めて新たなチャレンジを続けています。

<学校林支援活動>

松下電器が(財)オイスカに協賛し学校林整備事業を支援させていただいたのは2002年からです。松下電器として子どもたちの環境教育など総合的学習の一環としてお役にたてればということで、支援を決めさせていただきました。今年までの5年間で、首都圏・中部・関西地区で延べ11校の整備と啓発のためのフォーラムを2回、お手伝いさせていただきました。

対象となった一部の学校林では、付近の松下電器の社員が整備に参加させて頂きました。参加した社員より「生い茂る学校林を生徒や保護者の皆さんと一緒に楽しく整備しました。貴重な学校林を守るお手伝いできてよかったと思います。」という意見が多数寄せられています。

<今後の学校林活動に大切なこと>

学校林は確かにすばらしい活動ではありますが、その活動を継続し輪を広げてゆくためには克服すべき点も多々あるように思います。そのためには先生や教育委員会・PTAなど学校関係者や地元の地権者・ボランティア団体・整備事業者など直接関わっていただく方々に加え、国や県・市町村の関係者の皆様との連携プレーが欠かせないのではないのでしょうか。

学校林活動をさらに広めてゆくためには、2つのアプローチがあるのではないかと考えています。

①学校林活動を支える地元団体・メンバーの連携を強固なものにすること。

その学校を卒業された方とか、お子さんや親戚の子どもがその学校に通っているとか、地元の動植物に詳しい方、ものづくりに長けた方など、周囲にはすばらしい情熱とスキルを持った人たちが多くいらっしゃると思います。こうした方たちと学校関係者がいわば車の両輪として機能することによって、学校林を核とした市町村活性化事業として、地域に定着してゆくことも可能かと思われます。

②地域の方々や学校での活動の実態を、いかに多くの方に知っていただくか、という啓発活動も重要です。

国・県・市町村やNPO・企業など各セクターも、それぞれの立場から知恵を出し連携を図りつつ、積極的に学校林の環境教育的効果などの情報発信をすることが大切ではないのでしょうか。

<今回のサミットの意義>

今回のサミットにおいて、成功事例や現場の課題や悩みなどを共有化する場を持ったことは大変有意義でありました。特に子ども達の発表はすばらしく、写真・動画等を使用し、ストーリーもしっかりしており立派な発表であり、先生方の指導力と熱意・それを受け止め実践している児童達が頼もしく感じます。また、全国14校は児童数・学校林の規模・学校からの距離等が異なり、全国様々な学校林があることがよくわかりました。学校関係者だけで事業を行うには課題が多く、やはり地域・行政・企業など様々な関係者の協力が必要であると痛感しました。今後はこの情報を発信して全国に学校林活動を広めていくことが重要です。

<最後に>

松下電器グループでは、現在の事業ビジョンとして「ユビキタスネットワーク社会の実現」と「人類と地球環境との共存」を掲げています。未来を担う子どもたちが、学校林活動を通じて「人類と地球環境のよりよい関係」を考えていただく機会になればと願いつつ、子どもたちの歓声がひびくフィールドを1つでも多く提供して参りたいと考えております。